

鬼ノ城の謎を探る

～温羅伝説の地を訪ねて～

備陽史探訪の会

篠原芳秀・片岡美絵

2002年6月9日

スケジュール

福山発	8 : 30
吉備津神社着	9 : 15
鳴釜神事	9 : 30 ~ 10 : 00
吉備津神社発	10 : 30
鬼の釜着	11 : 00
鬼ノ城駐車場着	11 : 15 ~ 12 : 00
	(昼食)
鬼ノ城発	14 : 00
岩屋着	14 : 15
岩屋発	15 : 00
矢喰宮着	15 : 30
矢喰宮発	16 : 00
福山着	16 : 45

☆温羅（ウラ）伝説（藤井駿「吉備神社の釜殿と鳴釜神事の起源」より）

温羅の伝説は『古事記』や『日本書紀』には全く現れないが、『吉備津宮縁起』などに記されている。伝説の起源は定かではないが、少なくとも室町末期には、現在の形に完成していた。主な内容はつぎのようなものである。

吉備国には、異国から飛来した鬼神がおり、新山を居城としていた。かれは百済の王子で温羅といい、吉備冠者ともよばれた。都へ送る貢船をさえぎり、婦女を涼奪するので、居城は鬼ノ城とよばれ、恐れられていた。このとき、都からイサセリヒコノミコト（吉備津彦）が大軍をひきいてやってきて、吉備中山を陣とし、また橋築（たてつき）山に石橋を築いて交戦した。

温羅とミコトが矢を射合うと、矢は空中でかみ合っては海中に落ちてしまった。その矢をまつたのが矢喰宮である。

そこでミコトは、一時に二矢をつがえて射たところ、一矢はかみ合ったが、残る一矢が温羅の左目にあたった。流れた血は鬼ノ城のすぐ下の東の谷より流れる血吸川となったのである。温羅は雉になって隠れると、ミコトは鷹となって追った。そこで温羅は鯉になって血吸川に入ったが、ミコトは鵜となって捕らえた。そこが鯉喰宮である。そこで温羅は「吉備冠者」の名をミコトに献上し、ミコトは「吉備津彦」となった。温羅は首をはねられたが、その首は何年も大声でうなりつづけるので、犬に食わしたが、鵺體となってもなおおしまない。そこで吉備津宮の釜殿の下を八尺掘って埋めたが、なお13年もうなりつづけた。ある夜、温羅がミコトの夢に現れて、「我妻の阿曾媛に、ミコトの釜殿の神饌を炊かせよ。何か事があるとき、このくどの前に参れば、鳴り方で幸福を知らせよう。ミコトは世を捨てて靈神になれば、吾は使者になって人々に賞罰をくわえるだろう」と告げたという。そこでお釜殿は温羅の霊をまつところとなり、その霊を「丑寅みさき」とよんでいる。

以上の話が、今も伝わるお釜殿の鳴釜占いの縁起なのである。現在もこの鳴釜の神事は、阿曾出身の女性により続けられているが、この神事の記録は古い。『多聞院日記』の永禄11年（1567）にもすでに見えるが、江戸時代中期、上田秋成による『雨月物語』（1776年刊）の中の1話として取り上げられていることも有名である。また、『吉備津宮縁起』に見えた「丑寅みさき」を怨り神として恐れるのは、平安末期すでに記録されているのである。

これらの物語が、どのような形で、いつ、成立、完成して伝えられたかよくわからないが、古代吉備勢力の性格の一端が、何らかの形で影響していたことは考えられるであろう。

☆吉備津神社

主祭神 大吉備津彦命。孝靈天皇の第三皇子で彦五十狭芹彦命（ヒコイサセリヒコノミコト）。

崇神天皇10年、四道将軍に任ぜられた彦五十狭芹彦命は異母弟若日子武吉備彦命（ワカヒコタケビツヒコノミコト）とともに温羅を鎮撫し、その子孫は代々吉備の国造となり吉備臣を称して勢力をふるった。仁徳天皇の時代に至って、その子孫が吉備津彦命の功績を仰ぎ吉備国の総鎮護の神として祀ったのが創祀といわれる。

現在の本殿及び拝殿は後光厳天皇の勅命によって足利義満が造営した吉備津造りと呼ばれる社殿で、国宝となっている。延文二年（1357）に再建された南随神門、天文十一年（1543）の造営といわれる北随神門は国の重要文化財に指定されている。

この神社の特殊神事として有名なのが、吉凶や事の成否がわかるという鳴釜の神事である。

神社の背後の山は中山と呼ばれ、吉備津彦命の御陵といわれるものが残っている。

☆鬼の釜

鉄釜で、光景185 cm 、高さ110 cm 、縁の厚さ4.5 cm 。口縁が外へ張り出した特徴から鎌倉期の作と考えられる。総社市指定重要文化財。

この鉄釜はもと、現在地から北西約310 m 、湯釜谷の奥まったやや小高い位置の「釜の壇」にあったもので、1722年に掘り出され、菩提坊旧地境内に移されたという記録が残されている。温羅がつかった釜とも伝えられるが、山岳寺院と深くかかわる衆生施浴のためにつかわれた湯釜と考えたほうがよいと思われる。

☆新山廃寺

開基が弘法大師との伝承をもつ寺だが、現在は廃寺として地中深く埋もれている。

平安時代には「備中新山」「備中別所」とも呼ばれ、東の比叡山と並び称されるほど著名な山岳仏教の一大聖地であった。

鎌倉時代に入ってもなお、新山寺は備中屈指の大寺であつたらしく、東大寺再建の任命を受けていた重源によって、備中別所に浄土堂一字が建立され、そこに丈六弥陀一体が安置された、と『南無阿弥陀仏作善集』にみえる。

新山廃寺遺構からは平安初期から鎌倉初期にかけての古瓦が多数採集されている。中には、都の工匠の伝統的な巧技に成る文様である七宝文で飾られた珍しいものもあり、新山寺が単なる片田舎の寺院ではなく、中央に聞こえた大寺であつたことは間違いないだろう。

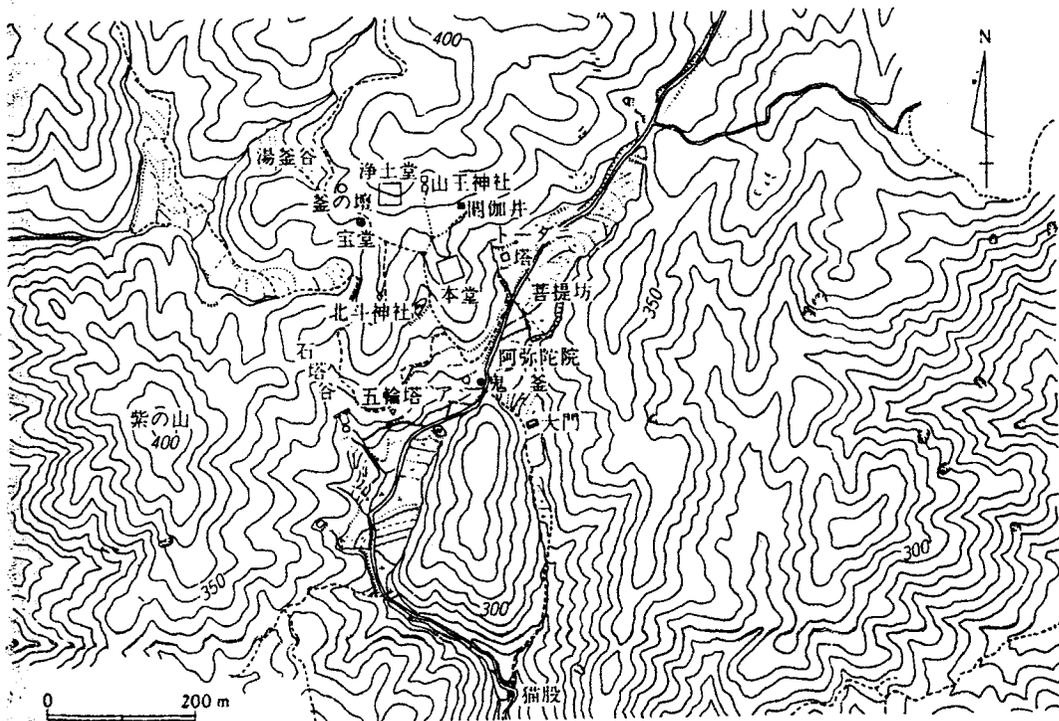


図238 新山廃寺遺構配置図(S=1:10,000) (総社市史考資料編刊)

☆鬼ノ城

いつ、誰が何のためにつくったのかいまだに定説のない古代山城。現在、発掘調査がすすめられている。謎が解明される日は近いかも！？

排水一体構造と判明

鬼ノ城 北門 (総社)

国内初発見 雨水での崩壊防ぐ

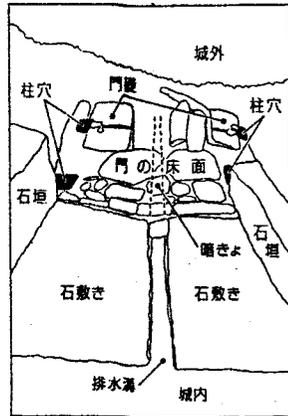
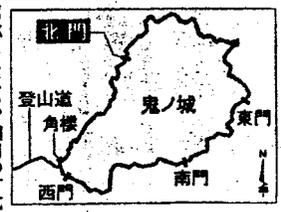
総社市教委が進めている古代山城・鬼ノ城(同市奥坂、国指定史跡)の北門跡の発掘調査で、十一日までに、全国でも例がない排水機能一体型の複雑な門構造であることが分かった。城の背面にある、裏門の敷重なつくりはあらためて、鬼ノ城の堅固さを浮かび上がらせている。

北門跡は全面石敷きで、一及石材を使い、一辺五十一間口二・五尺。柱や門扉が五移もの方形の柱穴跡も工事。門の城内側に接して付く門礎には長辺約二尺に、れまでに四角見つかった。石敷き面(最大幅四・九尺



奥行き二・六尺)が出土。その中央を通る排水溝(最大幅五十枚、深さ二十五枚)が、暗きよになつて門をくぐり、城外へ達していた。雨水で門を崩されなかった技術的工夫とみられる。鬼ノ城は、城壁のすそに敷石が設けられるなど水処理に繊細に気を配ったことが分かつているが、門にまで排水機能を付設した例は、正門と目される西南で成果を報告する。

調査担当の村上雄雄・同市埋蔵文化財学習の館館長が、十二日午後二時から総社市中央、市民会館である講演「よみがえる鬼ノ城」



鬼ノ城で出土した全国初の排水機能一体型城門。北門跡。城内側(手前)から排水溝が延び、門の下をくぐり、城外へ抜ける。門は城外寄りが崩れていた

☆岩屋寺・鬼の差上げ岩

標高400に前後の連山の一角にある真言密教系の山岳寺院。宍心(ゆしん)が書いた「岩屋寺記」によると、孝徳天皇のとき道教が開山し、皇子坊数114を数えたといわれる。この真偽はわからないが、岩屋寺が新山寺とともに平安期に構成した山岳仏教寺院であったことは間違いない。中世の戦乱期に入って衰微し、現在山上に坊はなく、寺そのものも無住。

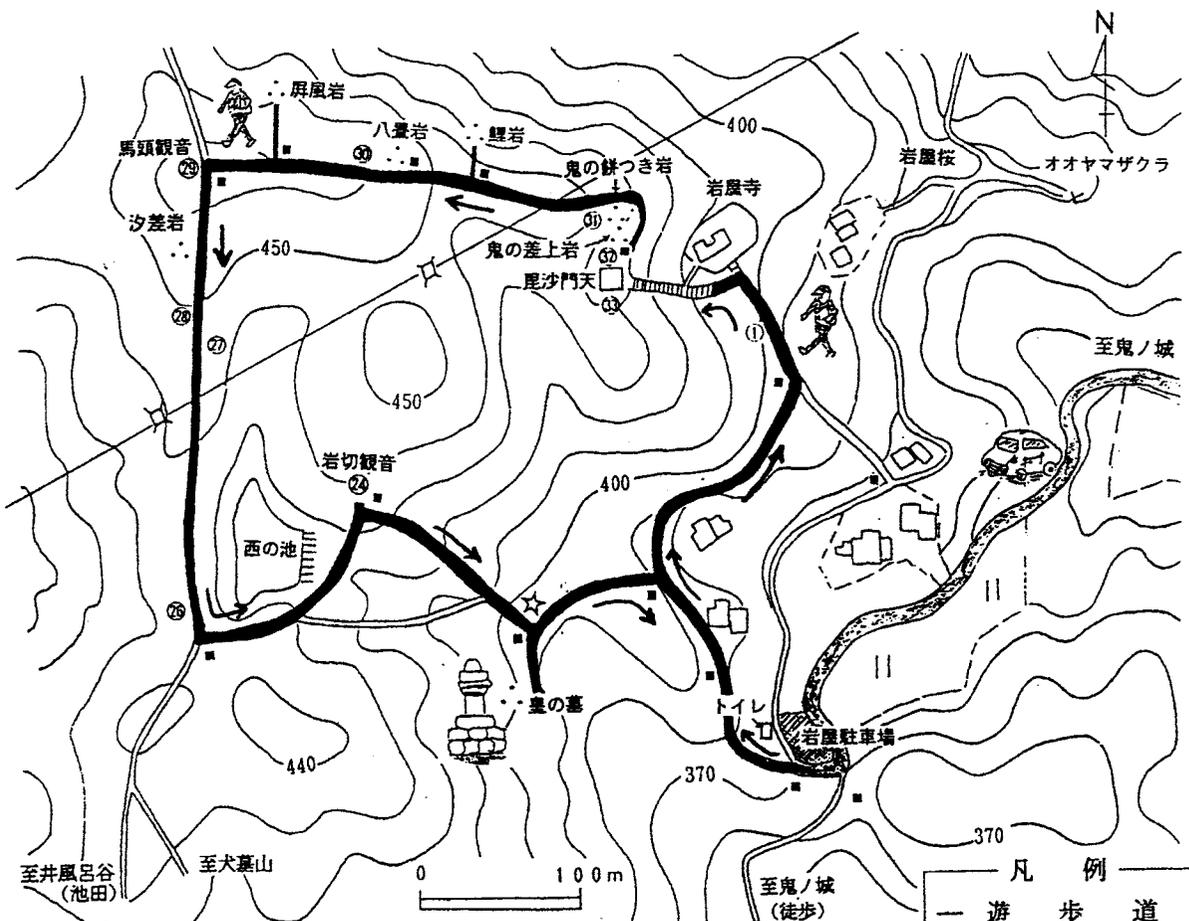
裏山に鬼の差上げ岩と呼ばれる巨岩と洞窟があり、温羅が住んだといわれる。

☆皇の墓

高さ101.19に花崗岩製の無縫塔。基礎・竿・中台は各八角、請花・塔身は円形で、全てが別石造りである。無銘であるが、様式から鎌倉末～室町初期の造塔と判断されている。県重要文化財。

岩屋寺の開祖、善通大師の墓と伝えられる。善通大師は文武天皇の皇子で、7歳のとき、岩屋山に登って僧侶となり、岩屋寺を建立した。

岩屋案内図

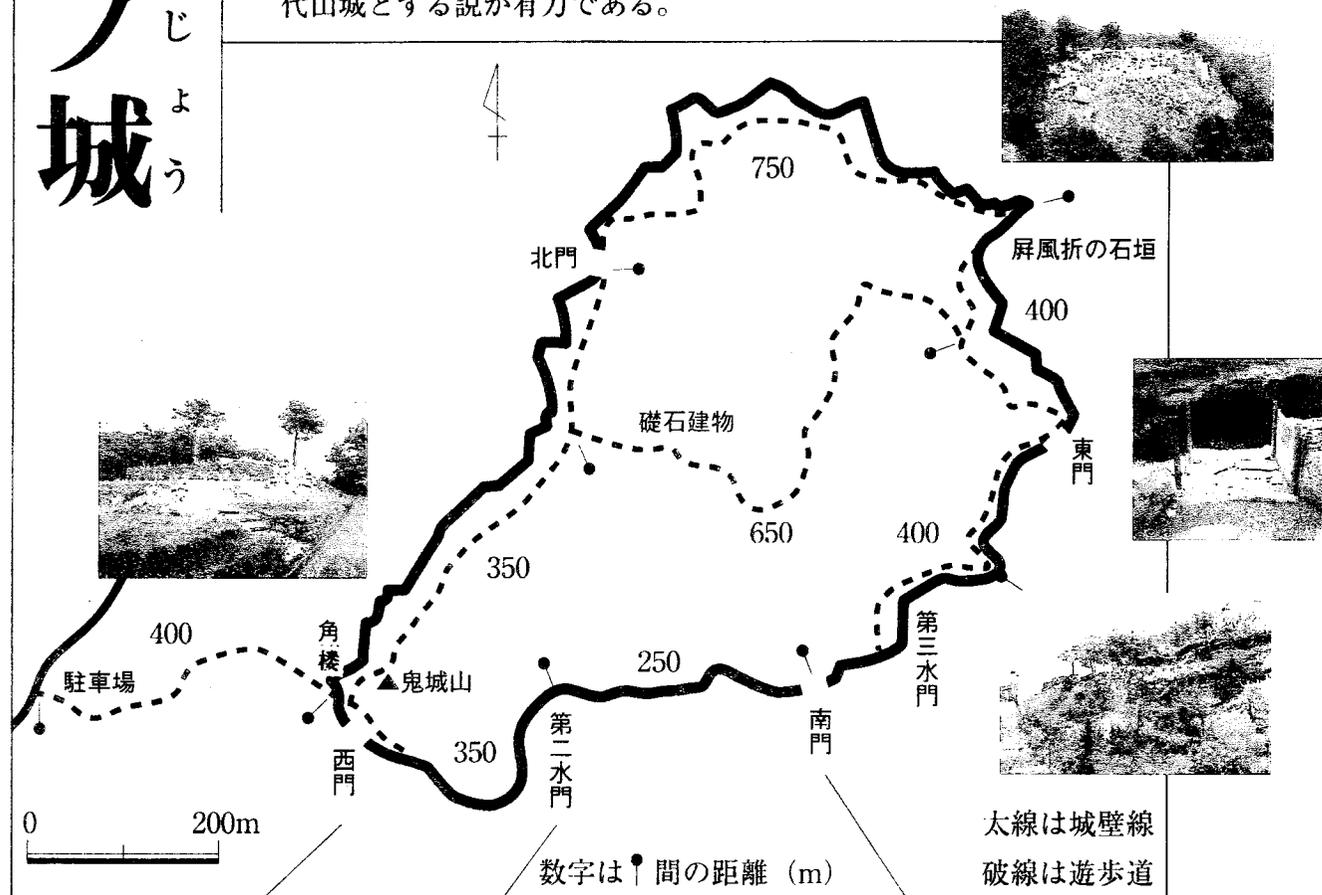


- 凡 例
- 遊 歩 道
 - ☆ 分 岐 点
 - 案内標識 (石柱)
 - ⊙ 三十三観音
 - ∴ 巨岩・文化財

鬼ノ城

国指定史跡（昭和61年3月25日指定）

およそ1300年ほど前、大和政権により国土防衛のために築かれた古代山城とする説が有力である。



<鬼ノ城の地名の由来>

鬼ノ城は古代の正規の歴史書には登場しないが、後世の文献である鬼ノ城縁起などにでてくる。それによると「異国の鬼神が吉備国にやって来た、彼は百済の王子で名を温羅（ウラ）という。彼はやがて備中国の新山（ニイヤマ）に居城を構え、しばしば西国から都へ送る物資を奪ったり、婦女子を掠奪したので人々は恐れおののいて「鬼ノ城」と呼び、都へ行ってその暴状を訴えた……」これが一般に温羅伝承と呼ばれる説話で、地名もこれに由来している。

<鬼ノ城の構造と規模>

鬼ノ城は、すり鉢を伏せたような形の山で、斜面は急峻だが頂部は平坦である。この山の八合目から九合目にかけて、城壁が2.8kmにわたって鉢巻状に巡っている。城壁は、一段一列に並べ置いた列石の上に、土を少しづつ入れてつき固めた版築土塁で、平均幅約7m、推定高さは約6mもある。要所には堅固な高い石垣を築いており、その威圧感は天然要害の地であることとあわせ、圧倒的な迫力をもっている。このように、版築土塁や高い石垣で築かれた城壁は、数m～数十mの直線を単位とし、地形に応じて城内外へ「折れ」ていることに特徴がある。城壁で囲まれた城内は比較的平坦で約30ヘクタールという広大なもので、四つの谷を含んでいるため、谷部には排水の必要から水門が六カ所に設けられており、また出入口となる城門が四カ所にある。城内には、食料貯蔵庫と考えられる礎石建物跡やのろし場、溜井（水くみ場）もある。

この他に城内には貯水池とみられる湿地が数カ所ある。さらに兵舎、各種の作業場なども予測されるが未発見である。

[主要遺構の解説]

<角楼跡>

かつて、ここには裏門的な門跡の存在が推定されていたが、平成8年度の発掘調査で城門ではなく、特殊な遺構であることが判明した。

ここは南北両方から入り込んだ谷の頭部にあたる背面側の要地で、正面側約13m、奥行側約4mが前方へ突出した長方形の張り出し部が、城壁に付設されている。張り出し部の下部は、推定高さ約3mの石垣とし、その上部は土積みであったようで、張り出し部の本来の高さは約5m以上と推定される。石垣の間にはほぼ4m間隔で、一辺約50cmの角柱が立つ。張り出し部の外側には、通路のような幅1.5mの敷石が巡っており、また、城内側には角楼への昇降のための石段もつけられている。

張り出し部をもつこの遺構=角楼は、背面側からの攻撃に備えるとともに西門防備をも意図した重要な防御施設と考えられる。

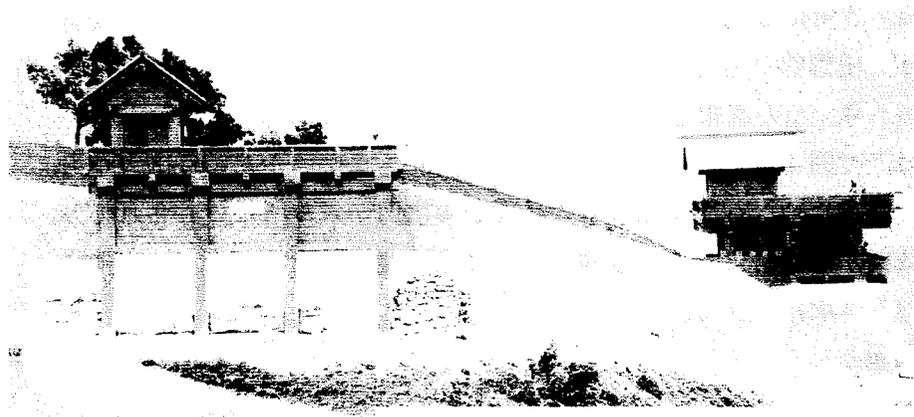
鬼ノ城は、標高400mの吉備高原の最南端に築かれている。眼下には、古代吉備の中心地であった総社平野や足守川流域平野を望み、吉備の津（港）も間近い。

かつて、朝鮮半島に進出していた大和政権は、天智2年（663）朝鮮半島の白村江の海戦で大敗し、唐・新羅連合軍の日本侵攻を恐れ、九州～瀬戸内海～畿内の生駒山系にいたる西日本の要所に大野城をはじめとする朝鮮式山城を築城したことが「日本書紀」天智4～6年（665～667）の条に記されている。一方、日本書紀などには記載がないが、朝鮮式山城と同種遺跡と考えられている神籠石式山城が16城あり、鬼ノ城もその一つである。

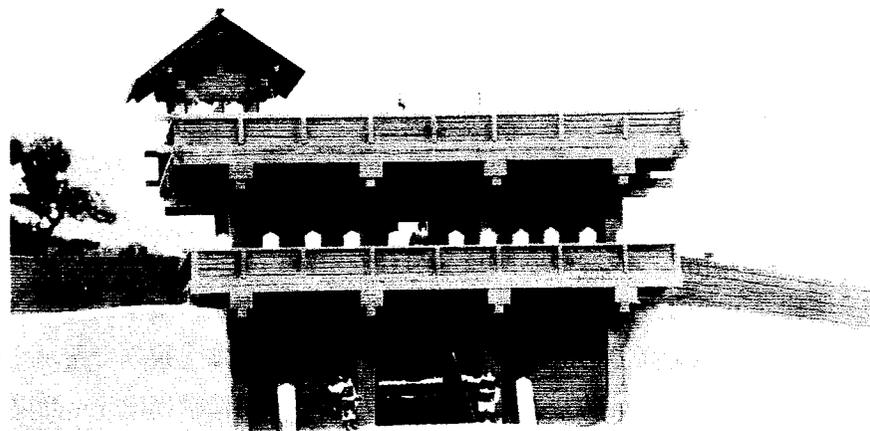
なお、角楼の存在、石垣の間に立つ柱、敷石が巡っていることは、日本の古代山城では初の発見例である。

<西門跡>

平成8年度の調査で新たに発見された城門である。正面3間(12.3m)、奥行2間(8.3m)の大規模な城門で、中央1間が開口する。12本柱で構成される掘立柱城門で、開口部の床面は大きな石を敷いており、その両側に6本の角柱が立つ。門扉のつく柱は、一辺最大60cmもあり、これに精巧な加工をした門礎を添わせている。門礎には方立・軸摺穴・蹴放しが刻まれている。両側の門礎とも原位置を保っていることから、開口部は間口約4mで、うち3mが出入口となる。扉は内開きである。扉を開け、4段の石段を上ると城内となるが、ほぼ3m間隔で4本の柱が立っている。この柱は、城内の目隠しと敵兵を分散させる板塀の柱と思われ、大野城(福岡県)大宰府口城門でもみつがっている。



角楼(復元推定模型)



西門(復元推定模型)

<南門跡>

西門跡と同構造・同規模の12本柱からなる掘立柱城門である。開口部の大きさも西門跡とほぼ同じだが、門扉の柱は一辺最大58cmでわずかに小さい。城内へは高低差があるため

7段の石段がつけられているが、眼前には高さ5mの尾根があり、行く手を阻んでいる。城内壁に沿って、開口部の両側に敷石があるが、その一部は城壁上の敷石である。城壁中に柱列(塩化ビニールで代用)があるが、これは板塀用の柱と考えられる。

この門の正面は急斜面となっており、どの位置から出入りしたのかははっきりしない。

南門は、廃棄後焼失しているが、西門も同様に廃棄後焼失している。

<東門跡>

鬼ノ城で最初に発掘調査した城門跡である。開口部の床面を石敷にしているのは、他の城門と同じだが、柱の数や種類は異なり、正面1間(3.3m)、奥行2間(5.6m)の6本柱からなる掘立柱城門である。柱の大きさは、最大径58cmの丸柱で、角柱の多用が目立つ鬼ノ城では異質ともいえる。城内には20×15mの一枚岩の巨岩があり、行く手を遮っている。南門跡の尾根と同じ役割を果たしているのであろう。城壁中に5本の柱列があるが、南門例と同じ板塀用の柱と考えられる。

<北門跡>

一辺最大55cmの角柱を用いた掘立柱城門跡で、構造的には、他の城門跡と同様であるが規模は未発掘のため不明である。

<水門跡>

城内に四つの谷があるため、谷水の処理が必要であり、六カ所に水門が設けられている。

水門は、外面の下部を石垣積み、上部は版築工法による土積みで、背面は石垣積みである。通水溝は石垣最上部につくられており、これは他の古代山城にみられない鬼ノ城の水門の特徴である。第4水門の通水溝は欠失しているが、これは谷が大きく水量が多いため壊れたものである。

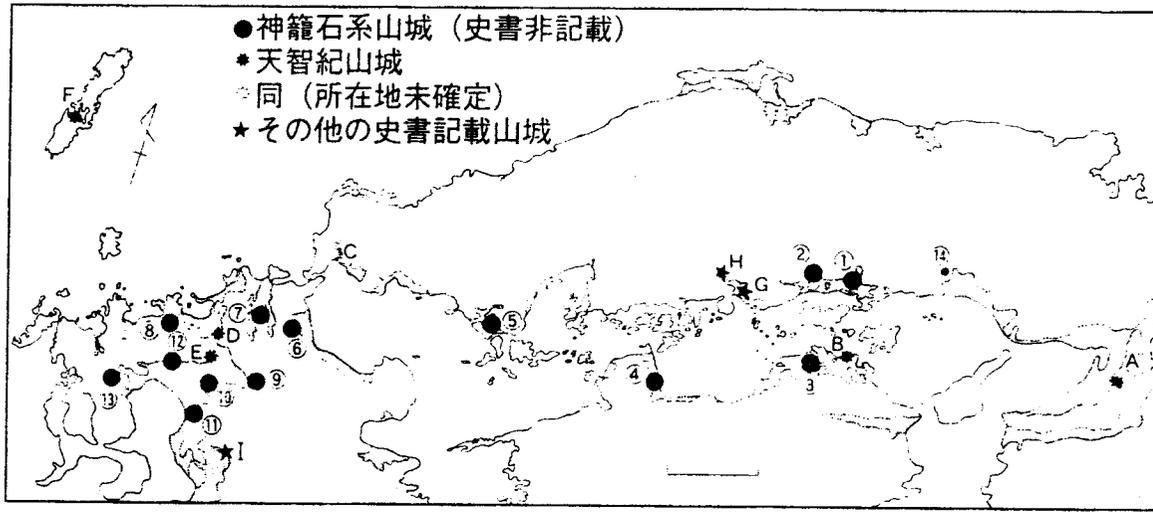
<敷石>

板状の石を敷き詰めて通路状としたもので、城壁に沿って内側と外側の両方にある。幅1.5mで通路というよりも、城壁が流水によって壊されることを防ぐための施設であるらしい。

なお敷石は、日本の古代山城では鬼ノ城にしかみられない。

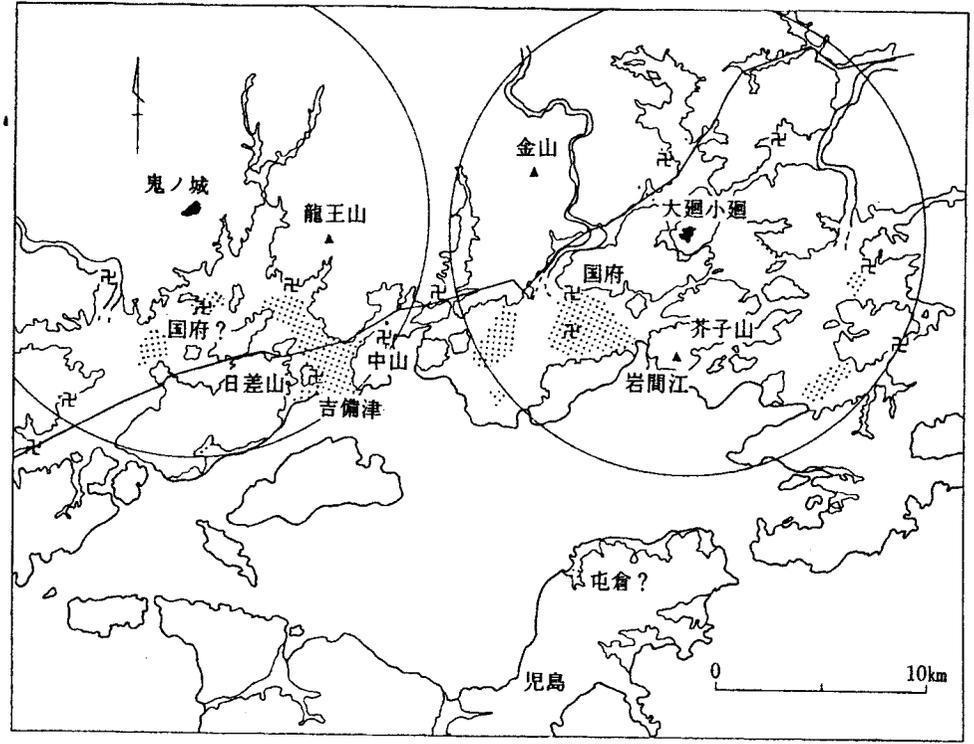
<礎石建物跡>

城内の中央部で、7棟が確認されている。礎石をもつ総柱の建物で、食料貯蔵庫と推定される。



- ① 大廻小廻山城
- ⑧ 雷山城
- A 高安城
- G 茨城
- アミは海岸平野
- ② 鬼ノ城
- ⑨ 杷木山城
- B 屋島城
- H 常城
- ③ 城山城
- ⑩ 高良山城
- C 長門城
- I 鞠智城
- ④ 永納山城
- ⑪ 女山城
- D 大野城
- ⑤ 石城山城
- ⑫ 帯隈山城
- E 基肄城
- ⑥ 御所ヶ谷山城
- ⑬ おつぼ山城
- F 金田城
- ⑦ 鹿毛馬山城
- ⑭ 城ノ山城

① 古代山城の分布



② 大廻小廻と鬼ノ城の位置

アミは中核的遺跡密集地、直線は山陽道、円は半径11km、寺は7世紀代のみ

② 山城の構造一覽表

山城名	所在地	外郭線 全周 km	総面積 ha	城壁一般部の主体						石				城壁一般部の規模				平地地面積 百㎡				
				土築・石築	夾築・内托 (比率の大小)	折・ 曲線	版築	列石	石垣・列石の石材	石材の形状	置き方	石材長辺 cm	壁面への 露出・被覆	列石前面の 柱穴の有無 と間隔 cm	高さ m	基本幅 m	水門石塔の規模		最低位の 平野との 比高 m	尾根	谷	総計
																	石垣高 m	幅 m				
鬼ノ城	岡山県総社市奥坂	2.8	30.6	石垣+土塁	夾築>内托	折	○	○	割石(粗・整)	扇形・長方体	縦・横	60~80	露出・被覆?	無	4~7	7.5ほか	7.0	7.5	230	161	176	540
大廻小廻 城山	岡山県岡山市草ヶ部 香川県坂出市	3.2	38.6	土塁	内托(複数段)	折	◎	◎	割石(粗)	扇形	縦	30~60	被覆	無	2~3	9.0ほか	2.6	6.2	65	100	40	524
永納山	愛媛県東予市	6.3	168.2	低石垣+土段	内托>夾築	折	×	×	割石(粗)	扇形	縦	40~70	被覆	無	2~3	7.5ほか	3		270	665	1130	2730
石城山	山口県熊毛郡大和町ほか	2.5	24.0	土塁	内托(類夾築)	折	◎	◎	割石(粗)	扇形	縦	80~100	二次被覆	有219・無	2~3	12ほか	7	約7	10	10	155	345
御所ヶ谷	福岡県行橋市ほか	2.5	23.8	土塁	内托>夾築	折	◎	◎	切石・割石	扇形・長方体	横・縦	80~100	被覆・露出?	無・有	3~5	9.2	7	約10	230	121	150	459
雷山	福岡県糸島郡前原町	3.0	31.7	土塁	内托=夾築	折	◎	◎	切石	長方体	横	80~100	被覆・露出?	無・有	3~5	7.5ほか	7.8		75	44	51	224
高良山	福岡県久留米市	2.3	28.7	土塁	内托>夾築	折	◎?	◎	切石	長方体	横	80~100	露出?	無・有	3~5	7.5ほか	3.5	11.7	300	35	225	525
女山	福岡県山門郡瀬高町	2.5	36.1	土塁	内托>夾築	曲	◎?	◎	切石	長方体	横	80~130	露出	有300前後	2~3			35	197	51	309	
杷木	福岡県朝倉郡杷木町	3.0	41.9	土塁	内托>夾築	曲	◎	◎	切石	長方体	横	70~80	露出	有300前後	2~4		2.5	9.0	10	38	35	133
帯隈山	佐賀県佐賀市	2.3	24.9	土塁	内托>夾築	曲	◎?	◎	切石	長方体	横	80~100	露出	有300前後	2~3		2.5	9.0	5	28	160	363
鹿毛馬	福岡県嘉穂郡瀬田町	2.4	23.5	土塁	内托>夾築	曲	◎	◎	切石	長方体	横	80~100	露出	有300前後	2~3	9.0		10	20	156	249	
おつぼ山	佐賀県武雄市	2.0	16.2	土塁	内托>夾築	曲	◎	◎	切石	長方体	横	50~80	露出	有300前後	2~3	9.0	2.3	9.0	0	60	48	223
大野城	福岡県大野城市ほか	1.9	16.5	土塁	内托>夾築	曲	◎	◎	切石	長方体	横	60~80	露出	有300前後	2~3	9.0	1.5	6ほか	0	40	70	147
基肄城	佐賀県三養基郡基山町ほか	6.5	181.4	土塁(+石垣)	夾築>内托	○	×	×	割石	長方体			露出	有300前後	4~5			140	1270	1840	3894	
金田城	長崎県下県郡美津島町	3.9	62.9	土塁	内托>夾築	○?	×	×	割石	長方体			露出	有300前後	4~5		8.0	130	173	376	988	
鞠智城	熊本県鹿本郡菊鹿町ほか	2.8	26.4	石塁	夾築	折	△	×	割石	長方体			露出	有300前後	2~7		8.5	(30)	50	40	215	
		3.7	55	土塁	夾築>内托?	△	×	×	割石	長方体			露出	有300前後			6.5	30	1739	1093	2832	

*注①②、鬼ノ城と大廻り小廻り、村上幸雄・兼岡実
③、吉備の考古学的研究(下)近藤義郎編、吉備山城、兼岡実

